Osaka University Knowledge Archive

Title	声の表現がひらく私たちのあいだ : ハワイ・詩の朗読パフォーマンスSpoken Word Poetry 創作過程の考察
Author(s)	小泉, 朝未
Citation	メタフュシカ. 2019, 50, p. 117-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73771
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

声の表現がひらく私たちのあいだ
──ハワイ・詩の朗読パフォーマンス Spoken Word Poetry 創作過程の考察──

小泉朝未

はじめに

本稿で扱うのは Spoken Word Poetry（以下「SWP」と表記）と呼ばれる、グループで詩の共同創作とパフォーマンスを行う活動である。SWP は学校や放課後に行われるプログラム、エンパワメント教育の一環として米国を中心に欧米圏で普及している。SWP の持つ理念には、そこに参加する若者たちにとって「重要なものを書く」（Fiore 2015:828）ことがある。後述するように先行研究では、従来の情報や知識を伝達する文学教育とは異なること、社会的な立場（教師－生徒、白人－有色人種、上流階級－下流階級）により使用できる言語の非対称性を変化させて、主体性を獲得する活動として紹介されることが多い。それは権利運動などと同じく、それぞれが独自の経験に根ざした声を獲得していく過程として語られる。声は権利の要求であることに加えて、実際に SWP のクラスで発せられるものであり、かれらにとって重要なものを伝える手段であり、表現の一部でもある。

また SWP は詩人らによる活動であり、実践者からの報告や研究では、いかに詩の創作とパフォーマンスをしあう場を作ることができるのかというプロセスにも焦点が当たってきた（Fisher 2007）。SWP に参加すると、数分前まで授業に退屈していた生徒もこうしたことが詩だと知って、やってみたくなる様子が報告されている（Fiore 2015:828）。SWP では表現や創作へと異なる出自や経験をもつ人びとが参加できることが目指されてきた。

本稿では筆者がハワイ・マウイ島で出会った SWP の授業への参加と記録を中心として、SWP の創作過程を通じて多様な人びとの参加が可能となるときに、参加者や詩人は SWP に特徴的な声をどのように用いるのかを明らかにする。それにより声の表現としての機能やそこで参加する生徒らにとって意義を考察する。

詩を作り、発表し合う活動は、日本の中でも多様な人びとと場を共有し、言葉によって自分のことを相手に伝え、相手のことを知る表現として用いられてきた（上田 2016、寮 2011）。しか

し、SWP という言葉は日本の文脈では普及していない[1]。そのため、SWP がどのような活動であるのかについて理解を共有する入り口として、SWP の概要をまとめ、本稿が焦点を当てる部分を定めていく。その後 SWP を実施したクラスの創作風景を再構成する。

１．先行研究の検討

１－１．SWP の概要

まず本項では、SWP の実施されてきた経緯や、確認されている意義や言説を見ていく。

SWP の概要と目的

SWP はそれまでの言葉を使ったパフォーマンスを基礎に発展した。詩の朗読大会やヒップホップ、ブラック・アーツ・ムーブメントなどが大きな影響を持ったために、教師や芸術家らはこれら言語による芸術が市民参加や若者の成長に力を持つことに気づいていった。SWP はこのような流れのなかで 1990 年から急速に人気を得て、実施されることが増えていった（Weinstein & West 2012: 283）。SWP とヒップホップなどそれまでの言葉を用いたアートやカルチャーとの違いは、「生徒たちにかれらの生の条件に疑問を持ち交渉するためのプラットフォームを提供したこと」であり、それによって社会変革を進めて来たことであるという（Fiore 2015: 814）。

SWP は現在、生徒・若者から支持を得て地域での活動を超え、Slam と呼ばれる朗読大会が全国、世界レベルで開かれるようになっている。国際的な大会としてはシカゴの Louder Than a Bomb[2] や、Brave New Voices[3] があり、毎年全米、国外からの参加者が集まる。

SWP と同様の活動として、筆者が確認できただけでも Youth Spoken Word、Spoken Arts Education, Poetry for the People, Slam Poetry, Performance Poetry などの呼び方がある。実施者の考えによって異なる名前で呼ばれているが、目的や形式を共有するためこれらの名前を区別せず、本論では SWP と呼ぶ（cf. Weinstein& West 2012: 301）。

SWP の実施の方法としては、学校、またはコミュニティ団体によるものがある。学校の場合担任の教員が SWP を実施する場合や、地域の芸術コーディネーターが学校とコミュニティに住む詩人らを結び、ともに授業や放課後プログラムを作ることもある（Weinstein& West 2012: 283）。

Brave New Voices を運営する団体 Youth Speak は、まず著名な詩人を学校へパフォーマンスできるように派遣し、それから指導者として訓練を受けた詩人や、地域で活動する詩人が滞在して SWP を組み込んだカリキュラムを教師らと協働して作り上げるプログラムを行っている（Fiore 2015: 827）。ハワイ州のオアフ島でも Youth Speak による詩人の滞在が行われた後、Pacific Tongues という非営利団体が立ち上がった。同州マウイ島でも、オアフ島や全国レベルでの SWP

1　筆者が日本でプロジェクトの開催を確認することができたのは、詩を読み上げ、得点を競い合う全国朗読大会で、そこでは以下に報告するような詩の協働創作は行われていない（Poetry Slam Japan2019）。

2　Louder Than a Bomb は Young Chicago Authors というクリエイティヴ・ライティングのワークショップなどをシカゴで行う団体が主催する大会。1000 人以上 12 チームが 5 週間にわたり、競い合うという（Youth Chicago Authors 2019）。

3　Youth Speaks（2018）参照。

への興隆に注目し、本稿に記すプロジェクトが実施されることになった。

Wiseman（2010）はSWPの意義を以下の通り4つにまとめている。SPWは1）かれらの感情や経験を書き物を通じて表現する学びの場をクラスの中に作り出す2）協働的な学びを促進する3）教師や生徒が参加するだけでなく、コミュニティメンバーを教室に招くことによって参加者全員に知識を提供することを可能にする4）詩を学校外でも書くようになりその後の職業選択や教育に結びつく（Wiseman 2010: 26）。SWPに参加した生徒・若者らは人生の中の感情的、社会的な側面についての詩を書き、自らにとっての優先事項や自分の価値を知ることができる。そのように詩やパフォーマンスへ興味を持つことで、学校への出席率が上がる、高等教育への進学を決めるなどの社会的効果についても言及されている（ibid: 30）。

また、SWPにおいてリテラシーの獲得という目的も強調されている[4]。アメリカでは黒人、有色人種などコミュニティから排除・周縁化される人びとの状況は公共の空間で用いられる言語にも反映されており、どのような話し方が「良い」とされるかどうかは特定のイデオロギーとなることが指摘されている。Critical hip-hop language pedagogyという学問領域では、文化ごとの言語の違いに自覚的になりながら教育の中で言語が持つ権力性や排除の力を指摘する（Alim 2007）。

SWPは、そうした言語の権力性に対抗するリテラシーを得る運動として取り上げることができるだろう。詩は「クリエティブで比喩的な言葉の使用によって自分自身を表現し、クラスでの学びで周縁化されていたかれら〔生徒ら〕の知識を中心に持ってくることができる」（Wiseman 2010:24-5,〔〕内は筆者による挿入）。そして、そのような知識の変化は、自分をどのような存在として捉えるかに変化を引き起こす（Jocson 2006: 703）[5]。

「ことば」の実践

以上にまとめた意義の他に、SWPはことばの実践として取り上げられてきた。以下では本稿が扱うハワイのSWPの文脈の理解を進めるため、ハワイの例についての先行研究を検討する。

本稿で扱うSWPを実施した詩人の一人が所属する非営利団体Pacific Tonguesは、「太平洋諸島出身者が、それぞれのコミュニティで地域に固有で、本来的に備わっており、持続可能なことばの芸術教育（Spoken Art Education）を作り出すこと」（Pat-Borja & Mateo 2015: 3）を目的にして活動しており、教育ガイドを執筆している[6]。

かれらのワークショップでは、詩を作ることよりも参加する若者たちの「意見や経験をことばで表現すること（verbalize）」に重点が置かれている。若者たちがあるトピックやテーマについての課題を議論して探究し、コミットできるようにすることに多くの時間を使う（ibid: 8）。

詩をパフォーマンスする朗読大会「Slam」への出場は、そうした目的のうちの一つでしかない。

---

4 Fiore（2015）、Jocson（2006）、Weinstein& West（2012）にリテラシーの獲得というSWPの目的が触れられている。

5 コミュニティや家族、Homeの感覚について詩を書き、書き直し続けることで都市の有色人種の若者（ブラックフィリピノ）としての自己の知覚は変化した例をあげて、Poetry for the Peopleのプログラムは、生徒が信念や経験を語ることのできるセーフスペースを作り出し、生徒に役立つ学び、新たなリテラシーを提供する力を持っているとJocson（2006）はまとめている。

6 ガイドにはかれらの教育方法を使って、批判的思考やリテラシーやコミュニティへの関与、若者のリーダーシップをどのように伸ばしてきたかについて多くの実例が集められている。

Slam は若い詩人が考えを伝え、人びとがそれを聞きにくることで、若者らが社会や生を見つめようとすることを祝福する公的な場所となる。そして若者どうし、コミュニティと若者との相互の関わり、交流が生まれる（ibid: 6）。

参加する若者自身の経験やことばを重視するという SWP の目標は、教育・哲学者のパウロ・フレイレの思想をもとに発展した[7]。Pacific Tongues はフレイレの『被抑圧者の教育学』に書かれた praxis の思想に言及する。praxis とは、ことばを発することに「行動と反省の双方を伴う」実践である。それは詩のワークショップでの振り返りや、SWP をファシリテートする詩人をコミュニティの中で育てる際の大切な指針となる（ibid: 17-19, 76）。

praxis の思想が重要であるのは、ハワイの歴史的状況に根ざしている。歴史的に入植者の目で怠惰で暴力的、無教育、文明化されていないと表されてきた太平洋諸島の生徒らの多くは、島の文学を読んだり、聞いたりしたことがない。西洋世界の中で成功するには、スポーツで有名になるか、軍隊に入ることが必要だと考える生徒の状況がある。そして教育の場においてはフレイレが指摘するような「先生が語る主体であり、生徒が聞く客体」であるような関係が起こっている（ibid: 81）。

フレイレにとって、ことばは対話のための道具やまして、教師が生徒を支配するための道具ではない。ことばを発することは、世界を主体的に肯定し、引き受け、省察することである。ことばを発することは世界を変革する実践であり、それは全ての人にとっての権利である（フレイレ 2018：170-2）。Pacific Tongues は以上のようなフレイレの思想を参考にしながら、ハワイの被抑圧状況を変えていくためのことばの教育を主軸に置いている。

このように、SWP で自ら経験を他の人々に伝える「ことば」は特権的な位置を占めていると言える。SWP で用いられるフレイレのいう意味での praxis, ことばの実践を、紙に書かれた言葉や言語と区別して、以下の記述では「ことば」と表記して用いよう。

先行研究の多くは、こうした SWP に関する言説を SWP が行われるクラスやワークショップでの出来事を捉えながら、まとめている。本節の最後にクラスやワークショップでの詩の創作過程がどのように描かれているか一つの例を取り上げる。

１－２．SWP の創作過程に見られる参加

ニューヨークで放課後プログラムとして実施されている詩の活動 Power Writing の報告には、先行研究にまとめられてきたことばやリテラシーの獲得の背景にある創作過程が参与観察をもとに記録されている。本稿で SWP のプロセスを捉える際に重要となるポイントをこの例をもとに引き出してみたい。

Fisher（2007）は参加者のピア・フィードバックのプロセス「リーディングとフィーディング」が Power Writing の核をなしているという。リーディングとフィーディングでは生徒が書いた詩を読み上げるだけでなく、積極的に聞き合い、お互いに意見を述べたり、アドバイスをしたりする。

---

[7] そのほか Jocoson（2006）、Fiore（2015）も SWP の源流にフレイレの思想をあげている。

Fisher の観察によれば、リーディングとフィーディングを始めたばかりの生徒らからは「気に入った」というような最小限のコメントだけが出るのに対して、Power Writing を運営する詩人らは「その何が気に入ったの？なぜ？なんの言葉が新しいと思った？」というように質問を加えることで、思考を深めることを試みる（Fisher 2007: 22）。感想を聞かれて「分からない」という生徒には、「どんな音楽が彼女の詩には合う？何をかけたい？」と聞いて、生徒はそれならこれ、とある曲の名前を出し、フィードバックが盛り上がる。詩人はこうしたやりとりを進めるために、「生徒の中に混じり、メモをとって、よくグループのリズムを聞き、いつ声をかけるべきかわかった上で、質問をする」という（ibid: 25）。

ある日のエピソードでは、亡くなった友人について書いた詩のリーディングとフィーディングが行われた。Power Writing を運営する詩人は、いつこの詩を書くことができたか聞き、友人が亡くなり六ヶ月後だという生徒に、どうして今が書くタイミングだと思ったのかを尋ねた。Fisher はリーディングとフィーディングでは、フィードバックを与えたり受け取ったりするだけでなく、活動に参加する「かれらが自分自身のプロセスを振り返る」（ibid: 28）ために時間が使われていると分析する。

またあまりにも重い内容の詩を聞いた後は、皆が感情的になり、リーディングとフィーディングが成立しない時もある。著者は参加者らの重たい雰囲気に対して文句を言う。しかし詩人はその時に「どの部分からその重みが来ているのかを見極めることに最大限集中しよう」と促す（ibid: 35）。リーディングとフィーディングでは、詩への応答を状況や文脈に合わせて行う。そして経験の重みを共有し、扱いが難しい問題を排除せずに、詩に応答することへの怖さを和らげあう（ibid: 36）。

以上の例から読み取れるのは、詩人らのプログラムの進め方の特徴である。参加者の詩の内容が何であれ、詩人らは発表したことを肯定し、「詩人は参加し、学ぶ人として聞いている」（ibid: 25）というように、生徒らと対等な立場にいる。そして、同じ経験をしているのではない他者に応答する怖さを超えてそれぞれの仕方で詩を意味づけることができるように、詩人はフィードバックを助ける。その場にいる人びとがそれぞれの仕方で場に参加することができるように、詩人は配慮し活動の場を作っていると言えるだろう。

次節では、上記の例を参考に、筆者が参加し、記録を取ることのできた SWP の様子を扱う。SWP に初めて参加し、詩を創作していく場面で参加が成立していく様子と、詩人の指示や動きに焦点を当てて、記録を再構成し記述する。

２．SWP 創作過程の記述

筆者が参加したマウイ島での SWP では、Pacific Tongues のメンバーである詩人の Travis Kaulula'au Thompson と、NY 出身の SWP の研究者であり、かつ詩人としてワークショップを開いてきた Moira Pirsch のふたりが協働し、中学校と高校それぞれ 1 校ずつでプロジェクトを実施した。プロジェクトを企画・運営したのは筆者のインターン先であった Maui Arts and Cultural

Center（以下 MACC と表記）だ[8]。

MACC は「SWP は口述パフォーマンスをする芸術形式であり、ことば遊び、リテラシー、吟唱、そしてアイデンティティの発達の美学に焦点を当てる」（ibid: 8）と説明をする。SWP のパフォーマンスとワークショップについて、自分自身の経験に基づくストーリーテリングの重要性やハワイに存在する「メレ（ハワイ語で歌の意）」や「フラ（ハワイ語で踊りの意）」とのつながりが確認できるという（MACC 2018: 4）。SWP の企画側はこれまで先行研究でみたような意義を見出し、それらがハワイの伝統や文化に共通性を持つことを重視していると言える。

2019 年の 2-3 月に行われた SWP のクラスでは、中学校・高校それぞれの一学年、全てのクラスが、90 分の授業を 3 回受け、いくつかのクラスでは筆者を含めた MACC のスタッフが同行し、記録撮影や先生へのインタビュー、授業の準備や詩人らへのフィードバックを行った。

SWP のプロジェクトは MACC の要望により図書館で実施された。中学校では図書館のフリースペースを用い、生徒 30 名程度が机を四角い囲みにして、みんなが顔を中央に向けるよう座り、詩人たちがその真ん中で指示を出すスタイルをとった。4-50 名が一クラスを構成する高校では、縦に繋げた長机が三列に並べられ、それぞれ机を囲んで生徒たちが座り、詩の創作を試みた[9]。

まず以下の記述では、2018 年 3 月 2 日に行われた中学校のあるクラスの創作の様子をまとめる。

チャイムが鳴ると、詩人らふたりがまず自分の詩を読み上げる。挨拶や昨日までのクラスの復習、注目を集めるための注意といった授業の開始する際の通常のやりとりよりも先に、詩のことばが筆者や生徒の耳に入ってくる。Travis はジェスチャーを豊富に用いながら、ことばを綴るペンをライフジャケットに例える。「あきらめないで、こんなふうに泳げよ」とペンを持つ手で何かを記すように手を掲げ動かす。「書けばお前の作ったものは永遠に残る」と彼は詩を締めくくる。

Moira は筆者がインターンの仕事で文字起こししたことのある詩を読み上げた。「私が全てを決められるなら、全世界は逆回転。落ち上がり、飛び下がる。地面を叩いたと思ったら、本当は空を掴んでいる。私が全てを決められるなら、貧乏人は貧乏じゃない。なぜって笑顔は黄金に値するから」。

生徒に向かって発せられる詩人らのよく通ることばが図書館に響き、おしゃべりで騒がしかった教室がしんと静かになり、生徒らはかれらの詩を聞き始める。ひじをつき、足を組み背を丸めているが、目は詩人が教室を移動するのを追いかけ、姿勢を変えながらかれらが読み上げられる詩に注目している様子が伺える。

その後最初にいつものルールを確認するといって、ふたりはクラスでのルールを確認し、ホワ

---

8 筆者は 2018 年 12 月から 2019 年 3 月半ばまで、MACC 内の、アウトリーチや教育プログラムを作る部署でインターンシップに参加した。筆者が SWP という名前の表現活動に出会ったのは、上司からビデオの文字起こしをして欲しいと YouTube のビデオが送られて来たときのことだった。彼は SWP をハワイのマウイ島でも広げようとプロジェクトを進めており、筆者は SWP について知ることになった。

9 中学校で SWP の授業が実施されたのは、2018/2/26-3/2、高校で実施された期間は同 /3/5- 9 である。筆者は 3/2 と 3/9 に授業の見学をし、3/6 と 3/7 に MACC で開催されたアーティスト・一般向けの SWP のワークショップに参加した。

イトボードに書き出す。1）挑戦すること 2）誰でも尊重すること 3）基準は自分であること 4）間違った答えはないこと（try, respect, standard is yourself, no wrong answer）。SWP のクラスに臨む際の姿勢を詩人らはルールとしてこのようにことばと文字で生徒と確認をする。

次に Moira が「自分のあとに続いて詩のことばを繰り返して」と生徒らに言い、用意してきた短い詩を読み上げる。

“I am a poet.

I am a poet and I know it.

I am a poet and I know it because I flow it.”

1 行ごとに生徒らが耳で聞いたことばをそのまま口にして繰り返す。詩のことばはホワイトボードやプリントに書かれているわけではないので、耳でことばをコピーする。I am a poet という語が反復されるため、生徒らにとって詩をスローガンのように繰り返すことは簡単なようだ。Moira が読み上げるときの独特の調子を生徒らも繰り返していて、詩のリズムやスピード感が一体のものとして伝わってくる。

次は詩人が出した質問に生徒一人ひとりが答えていくアイスブレイクが行われる。「今日の気分を天気に例えるなら？」「羽を持った生き物になるとしたら」などの質問が詩人らから出される。円になって座っている生徒が順番にどんな天気なのか、何の生き物になるのか答えていく。筆者が同行したクラスの中学生は集中力が持たず、おしゃべりができる瞬間になるとそのあとはそれぞれがクラスメイトとずっと喋っていた。詩人らはその状況に対して、アイスブレイクの時から、誰かが一人で言葉を発しているときに、他の生徒らの私語や集中していない様子が見られれば、「ことばを聞いて」と促す。

アイスブレイクを経た後には、詩をそれぞれが書くために、word pallet または word bank と呼ばれることば出しの作業を行う。あるテーマとなることばを詩人が最初に生徒らに提示する。この時は「建物」と「人」がテーマだった。

二つのことばをホワイトボードに書き出して、Travis は生徒らにテーマから連想できることばを尋ねる。生徒たちは口々に思いつくことを挙げて、Travis は誰が何のことばを発したか、聞こえてきたことばの方を向いて確認し、そのことばを繰り返す。彼が繰り返したことばを Moira はホワイトボードに書かれたテーマの下に書き取っていく。途中で、Travis はことばを聞き取るだけでなく、テーマに関わる質問をする。例えば、「建物」がテーマの時には、「人を癒す建物は？」、「声」がテーマの時には、「声を持っている人は誰？」「声を出したいときはいつ？」などの質問を投げかける。

こうしてテーマとなることばの周りには、関連することばのリストができ、同時にその場にいる全員でテーマに関連することばを共有していくことができる。特にテーマに関係していないから間違い、というようなやりとりはなされない。それぞれなんらかのことばを口にして教室は賑やかになり、全てを書き切ることはできないがホワイトボードはすぐにみなが出したことばでいっぱいになる。

詩人たちは出来上がったことばのパレットから、気に入った一語を選ぶように生徒らに言い、

アイスブレイクの時と同じく順番に読み上げてもらい、読み上げる以外の生徒には何のことばをそれぞれのクラスメイトが選んだのか聞くように促す。

こうしたプロセスに時間をかけた後に、生徒それぞれが詩の創作を始める時間となる。生徒らはホワイトボードに残ったことばのパレットの中から、3 から 5 語を好きなように選び、選んだことばを入れて詩を完成させるように言われ、創作を始める[10]。そこで生徒らに与えられる時間は 10 分ほどである。

詩を書くのは、プリントに向かっての各自の作業となるが、詩人らは生徒の周りをうろうろする。鉛筆が止まっている、白紙のままの生徒がいれば、詩人らは一人ひとりに話しかけ、何だったら書けそうか、関心は何にあるのか尋ねていく。詩人らは生徒それぞれの様子をみて、即興で詩を作ってモデルを見せながら、とにかく何か書いてみるように促す。

時間になると、詩を書くのを止めるように詩人らは言い、隣り合って座っている 4-5 人をグループごとに立たせて、1 人ずつ詩を読み上げてもらう。詩人たちは中学生が詩を読み上げることを嫌がるのを見越してか、詩の中の一単語、一文だけでも良いから、読み上げてと呼びかける。そして、詩を読み上げる際にも詩人らは音頭を取る。Moira は詩を読み上げる生徒の名前を呼び、手拍子をみんなで一回打つ。「新しい詩人を歓迎しよう」と言って、生徒に読み上げてもらう。

生徒は一人ずつ、ある人はぼそっと、ある人は堂々と詩が書かれたノートや紙を見ながら詩を読んでいく。読み上げられる詩を聞くクラスメイトは静かにして、図書館の椅子や机で思い思いの姿勢を取りながら、新たに詩人となったクラスメイトの方へ耳だけは向けている感じが伝わってくる。詩を読み終わった生徒に Moira は感謝を述べて他の生徒への促しとともに手拍子二回を送る。

生徒の中には「私は詩人じゃない、だってクリエイティブじゃないから」といった詩を読み上げる人もいる。その詩は生徒自身を否定するように聞こえるが、詩人らは同じように拍手を送り、感謝を述べる。一連の詩を読み上げた後には生徒らから歓声が自然と上がる時もある。

詩人たちは、「今日短い時間で完成させた詩に満足しなくていい。家で書く時には、もっと時間をかけて、気に入るまで書いたらいい」とアドバイスをして、SWP のクラスは終了した。

上記の記述からは、クラスで初めに共有されるルールに加えて、詩人らのクラスの進め方によって、生徒が互いに対等な立場でことばを出し、ことばを選び、詩を作り、詩を声にする作業に参

---

10 今回のクラスの内容は SWP に初めて参加する生徒たちのために準備されていた。自ら詩を書くことができるようになる第一歩として、今回は詩の一文目があらかじめ決まっている定型詩を用いて、生徒がその後の文章を創作するスタイルが取られた。
詩は、自分の人生がもっとも重要な参照先だと詩人たちは言う。そのため、クラスでは以下のような詩の創作が試みられた。まず、
You think you know but you have no idea, I am ….
（訳）あなたは知っていると思うでしょうけど、こんな私のことは知らないでしょう、私は…
次の詩は、At age of…, I was…
（訳）私が〇才のとき、私は…
三つ目に、Who is…,（本人の名前）！という詩で、私が答えとなる質問文を考える。

加していく様子が読み取れる。次節では、このような参加に、SWP 独特の表現である声がどのように関係していくかを考察する。詩人らが声を用いてどのように振る舞い、参加者を方向づけ、声が参加者の表現となるかに焦点を当てる。

３．創作過程の考察

３－１．詩人らの声の用い方

詩人らの声の振る舞いを振り返ってみよう。まず授業始めの詩人らによる朗読の声は、朗読を聞く生徒らの SWP 参加の入り口となると言える。

詩人らは、書いた詩をクラス全員に向かって発し、聞いてもらう。ここでは自らの書いた詩のことばを身振りを伴いながら読み上げる〈声を出す〉こと、その声は具体的に目の前にいる相手という〈宛先〉に向かって発せられること、その場にいる人びとは声を〈聞く〉という声を成り立たせる三つの側面が現れ、それらが組み合わせられることで、詩人は詩を読みあげ、生徒は詩を聞く場に参加することができる。

前節の記述を振り返ると、その後の創作過程においても生徒らと詩人らのやりとりや、生徒らが詩を読み上げるときには、詩人らの詩の朗読に見られる声の三側面が現れ、組み合わせられていることが確認できる。

クラスのルールの確認後、詩人の用意してきた詩を耳で覚えてみなで唱える時には、まず詩人は詩の 1 行を読み上げ、生徒たちに〈聞いて〉もらう。同じく生徒らは耳で覚えた詩のフレーズを〈声に出して〉繰り返すことで、詩人に〈聞いて〉もらう。詩人の声は生徒らに向けられ、生徒たちは詩人にことばを声にして返すというようにどちらの声にも〈宛先〉がある。詩の復唱は、声の宛先に着目すれば詩人と生徒ら互いへの応答である。

その後のアイスブレイクやワードパレットから好きなことばを選ぶ時には、生徒ら一人ひとりがことばを〈声に出す〉ことに焦点が当たっている。〈宛先〉はクラス全体であり、一人ひとりの生徒の声をクラス全体で〈聞く〉ように詩人らは注意を促していた。このようにして詩を作るまでに、生徒たちが宛先を持って声を出すことと声を聞く環境づくりに時間がかけられている。

声を出し合い聞きあう準備をした後で、詩を読み上げることが行われる。手拍子をみんなでしたあとに、詩を読み上げることで、手拍子をきっかけに生徒らは自然と詩を〈聞く〉姿勢へと入ることができる。Moira は「拍手されれば気分が良くなって、読み上げようと生徒たちは思うことができる」と MACC のワークショップで語り、詩を読み上げる前と後に生徒全員で手拍子を贈ることを欠かさないという。詩を読み上げる段階でもこれまでと同様に〈宛先〉を持って〈声を出し〉、〈聞く〉ことが一体となって重視されている。

このように詩人らが声の用い方を方向づけることで参加者らが同じようにして声を用いて SWP に参加することが可能となったと言える。

次項以降ではこのような SWP の声を参加者にとっての経験、意味から捉え直す。それにより声の背景として働く身体の働きとその表現の持つ特徴について考察していく。

３－２．身体としての声

宛先を持って声を出し、聞いてもらうことは参加者にとって、どのような経験なのだろうか。中学校での SWP の授業に参加した生徒は、本当に自分の言いたいところを正直に口にすることができる場所では、全てが意味を持つことがわかったと開催された Slam のイベント後に語った[11]。言いたいことを声にして言えることで、発したことばの全ては意味を持つ。それは彼女自身がことばを発することで得た学びであり、それが聞き手にとっても同様の経験であることが Pacific Tongues のガイドには示されている。

かれらは声にした詩は書き物としての詩よりも、何が言いたいかをより伝えるものであるという。クラスの中でさまざまな言語の理解や作文の能力があり、書いた詩をクラスメイトに配り、見てもらうことには困難が生じる。文法上の不足は目にすればすぐにわかってしまう。しかし、逆説的にその間違いが、読み上げる段階では何を伝えようとしているのかを知らせるという。「〔文法間違いなどをする〕全ての生徒たちはかれら自身について思考し、自分で語ることはできる。そして書いたものを読み上げる機会を与えられる時、かれらのことがより明らかになり、理解できるように響く（sound）。それは言いたいことを私たちに聞かせるために、文法間違いの全部を通じて読み上げるからだ。」（Pat-Borja & Mateo 2015: 8、〔〕内は筆者による挿入）

以上の記述から、SWP でことばは声に出されることで新たな意味を生み、それを聞く人びとを含めてその声の発し手の理解を進めることがわかる。紙の上に載った言葉は記号としては、文法的な欠如や言葉を扱うことのできる能力を指し示す。しかしそうした記号上の間違いも声となると、聞いてもらいたいことを表すような意味を持ち、自分自身に、そして相手に「響く」のである。

声が文字としての言葉で示されるのとは異なる「その人」の理解を進めるときに、声の発し手と聞き手は相互にどのような働きをしているのだろうか。メルロ＝ポンティはことばによる意思疎通において、話し手と聞き手の相互性を排除しない記述を行っている。『世界の散文』の中では、以下のように、話す主体によることばのやりとりと相互理解が詳しく記述されている[12]。

> 私が他人と意思を疎通するのは、私が自分の思想をすべて語の中に沈殿させ、他人がそこに私の思想を汲み取りにやってくるというふうにして行われるのではなく、私ののどで声や抑制、さらには当然のことながら、語やわたしの好む構文、わたしが文の各部分に付与しようとして選んだ時制などによって、ただ一つの回答しか許さないような謎を組み立て、しかも他人が沈黙したまま、調合や強弱の変化に満ちたこのメロディーに従いながら、その謎を自

---

[11] 筆者がインターン先の同僚と撮ったインタビューで、中学校の生徒は SWP のクラスについて以下のように語った。“I learned now where it have meanings everything that you say and that you're able to speak what you really mean.”

[12] メルロ＝ポンティはソシュールの言語学から「ラガージュ」、「パロール」の区別を受け継ぎながら、ラガージュをすでに制度として固まった言語として、パロールを制度となる以前の発話遂行という従来の意味よりもさらに限定された、言語の創造的用法である語る言葉（parole parlante）として記述し、パロールの言語論を展開することが知られている（佐野 2015:17-9）。『世界の散文』では、文学研究や言語研究、科学の中にもその基礎として語る主体の経験に基づいた考察が必要あることを訴え、語る主体についての記述がみられる。

分のものとして捉え、それを私と一緒に言うようになるというふうにしてなのであり、それが了解するということなのである。（メルロ＝ポンティ 1979: 49）

声を中心にこの記述を見てみると、意思疎通して理解しあうことのうちで、声を発することと、その声を聞くことの二つの記述が絡み合っている。まず他者に何かを伝えようとする私は、身体器官ののどを使い、声の抑揚をつけ、使いやすい文法やことばを用いて、それら全体を通じて自分の思想や考えを組み立てていく。向かい合う相手は、自ら声を出して確認するのではないが、私の声や抑揚やことばの使い方を自らの中で「私と一緒に言うように」辿ることで私の伝えることを理解しているという。声が耳へと届くからこそ、その抑揚やことばの使い方に含まれる意味を聞き手が身体で辿り、理解することが可能となる。

声が発し手の身体の用い方を変化させ、ことばの表現を生み出す一方で、距離の隔たった相手へと声は届き、相手側の身体に触れ、それまで持っていた身体と言葉との関係を更新するように促す。声の「届く」という性質は、声が実際の身体から離れて独自に運動していく身体であり、世界を新たな仕方で進む道を切りひらくものであることを示している。開かれた道からは新たな景色が見え、声が届いた人々はその道を自分の側から辿って、声の発し手に見えている景色を一緒に眺めることができる。

SWP では書かれたものを読み上げる段階で、詩は身体的な表現として前景化し、詩を書いていた時とは異なる表現として経験されていると言えるだろう。SWP の詩は読み上げられることで、またその詩が聞こえてくることで身体としての声が展望を開いていく。声は世界が可変的なものとしてあることを確かめ、それを同時に聞き手である他者の前にも意味あるものとして展開する表現となるのである。

３－３．声が交通する私たちのあいだの世界

声によって新たに開かれる展望は、先に Pacific Tongues のガイドにまとめられていたように学校や植民地支配によって見ることを抑圧されていた景色でもあるのではないだろうか。声は身体であるからこそ、発し手の世界の見方を体現しているだけではなく、世界に道を交通させ、新たに意味を生み出し、それによって、視野を広げ、これから行動できる範囲を変化させる。そうして見える展望は主体的な表現がもたらしたものであるからだ。最後に本点をめぐり、SWP が行われる学校や植民地支配がなされてきたハワイという文脈において、これまでに見てきた声の働きはどのような意義を持つのかをまとめて本稿を結びたい。

制度の中に生きることが当たり前で、その外を想像することが難しい学校空間や周縁化された島では、制度はすでに強固なものとしてあり、自分の世界を制度へと沿わせるか、もしくはその制度から脱するかの二者択一しかないような感覚を持つ。学校や国家などの持つ形式やルールは、私たちの外側を取り囲んでいるように感じられ、そこで隣り合う私たちは制度によって集められている。その集合性が自発的でないがゆえに暴力的なものに感じられるときもあるだろう。

先述してきたように、SWP の声には宛先があるが、それは制度や学校に向けられるよりも先に、

となり合う相手に向けられるものだった。「本当に言いたいこと」を声にするのは、世界の中に道をひらくことで目指す相手がいるからである。SWP では、そばにいる相手に声を聞いてくれる自分の行為を委ねる瞬間がある。筆者はインターン期間中に SWP のワークショップを同僚と体験し、詩を読み上げる時には、同僚らから拍手が聞こえてくると、そのテンポの良さに乗って、読み上げることへの不安を考えるのをやめて、詩のことばを声にした。読み終わった後には、みんながこちらを向いて拍手をしている。気づけば詩を声に出しており、それは受け止められていた。声とはそのような表現の経験だった。

相手という宛先に自分を委ねて声を発することは、自分の世界が制度に閉じ込められてあるのではなく、世界はそもそも自分に向き合う相手とのあいだにあり、互いに耕していくことのできるものであることを確認する作業である。SWP では、詩を読む宛先は「ある他者」というように一対一の関係に限定されず、クラスで同じように創作をしてきたクラスの複数の仲間だ。制度のもとに知覚される学校や島での生活状況を共有する複数の相手とのあいだにある世界は、与えられたものとして強制された集合性だった。しかし声によって相手に宛てて道をひらき、聞こえてきた声を辿って道をゆき、そこからともに新たな景色を見ることで、あいだの世界を私たちは感知し、私たち自身のために使うことができるようになる。あいだの世界を交通する道を声は作り出すからこそ、声の表現は私たちのすでに持っていたあいだの世界の共有性を確認し、その共有性を新たな世界を主体的に作り上げるための土壌へと変換させていく[13]。

SWP は詩を声にすることによって、私たちの身体を利用して声を聞く相手とのあいだの世界を知り、そこからともに新たな展望を開いていくものだ。SWP のことばの実践が主体的に世界を変革する実践であるというのはこのような意味で成し遂げられるのであり、本論はその契機である身体としての声の表現を捉えた。

（こいずみあさみ　臨床哲学・博士後期課程）

参考文献・資料

Alim, S. H. (2007) 'Critical Hip-Hop Language Pedagogies: Combat, Consciousness, and the Cultural Politics of Communication', *Journal of Language, Identity & Education* 6 (2), pp. 161-176.

Fiore, M. (2015) 'Pedagogy for Liberation: Spoken Word Poetry in Urban Schools', *Education and Urban*

[13] ほんま（2018: 89-92, 101）は、おんなたちが集まり、声に出し合い自らの経験やそれに基づく知識を交換し、その経験を社会に対して顕在化させるコンシャスネスレイジングの活動が、「客観的世界の構成や他者構成、他者理解や了解志向の基盤となる間主観性 intersubjectivity とはべつの、「主体のあいだの関係 inter-subjective relationship」の上に成り立つ」と述べている。そこでは、ことばによって「共通の意味」とともに、「差異」が見出され、わたしたちのものとして経験が捉え直されていく。ほんまが「主体のあいだ」を間主観性と区別するのは、他者との差異を吸収または平均化してしまう共通の地盤として「あいだ」が読解されることを危惧してのことだろう。同様に、本論で指摘したようなあいだの世界の共有性を認識することは、制度から与えられた世界に対して主体的に声によって道をひらき、他者へと何かを伝えようとする地盤の上に互いにのっていることを知る作業である。他者へと向かう道は一本ではなく、道の外にも土地が広がっているように、他者との異質性をあいだの世界は保つ。共有性を指摘することが異なる他者との同化へと向かう意味を持つのではないことを確認しておきたい。

Society 47 (7), pp.813-829.

Fisher, M. T. (2007) *Writing in Rhythm -Spoken Word Poetry in Urban Classrooms,* Teachers College Press, pp. 1-36.

Jocson, K. M. (2006) '"There's a Better Word": Urban Youth Rewriting Their Social Worlds Through Poetry', *Journal of Adolescent & Adult Literacy* 49 (8), pp.700-707.

Jocson, K. M. (2008) *Youth Poets -Empowering Literacies In and Out of Schools,* Peter Lang Publishing, pp. 1-14.

Maui Arts & Cultural Center (2018) *Arts Education2018-2019,* Maui Arts & Cultural Center

Pat-Borja, M. W., Mateo, J. (2015) *Cultivator: Pacific Tongues Educators' Guide.*, Pacific Tongues, pp. 1-87.

Weinstein, S. West, A. (2012) 'Call and Responsibility: Critical Questions for Youth Spoken Word Poetry', *Harvard Educational Review* 82 (2), pp.282-302.

Wiseman A. M. (2010) '"Now I Believe if I Write I Can Do Anything": Using Poetry to Create Opportunities for Engagement and Learning in the Language Arts Classroom', *Journal of Language and Literacy Education* 6 (2), p.22-33.

上田暇奈代（2016）『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム』、フィルムアート社。

佐野泰之（2015）「メルロ＝ポンティにおける〈語られた言葉〉の問題」『メルロ＝ポンティ研究』19, pp. 16-30。

ほんまなほ（2019）「臨床哲学とフェミニズム　〈聴く〉から〈ともに語る〉へ」『臨床哲学』20, pp.83-103。

パウロ・フレイレ（2018）『被抑圧者の教育学―50 周年記念版』、三砂ちづる訳、亜紀書房。

モーリス・メルロ＝ポンティ（1979）『世界の散文』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房。

寮美千子（2011）『空が青いから白をえらんだのです―奈良少年刑務所詩集―』、新潮社。

Poetry Slam Japan (2019)「ポエトリースラムジャパンについて」、Poetry Slam Japan。

http://poetryslamjapan.com/about.html（最終閲覧日：2019 年 9 月 1 日）

Youth Chicago Authors (2019) 'Louder than A Bomb', Youth Chicago Authors.

https://youngchicagoauthors.org/louder-than-a-bomb（最終閲覧日：2019 年 9 月 1 日）

Youth Speaks (2018) 'Brave New Voices', Youth Speaks.

https://bnv19.youthspeaks.org/（最終閲覧日：2019 年 9 月 1 日）

“In-between world” held by voice expression: A study of co-creation in Spoken Word Poetry

Asami Koizumi

This essay will focus on the process of co-creating Spoken Word Poetry in a school class to reveal its propensity to reform and actively emancipate the perspectives of the participants by particular use of their voice expression. Spoken Word Poetry is an expression movement that began in the 1990s’ to cultivate literacies and allow the self-evaluation of the experiences of youths which are marginalized in schools and the hierarchies of society. Paulo Freire’s definition of praxis provides the philosophical background that highlights Spoken Word Poetry practice as action and reflection by raising their own voice. Spoken Word Poetry is usually organized by local poets and they encourage students to write about what matters to them and to give active responses or feedbacks to their peers who write and read aloud their poems together. These processes of co-creating Spoken Word Poetry allow students to engage and participate in a creation even though they have different roots or experiences. This essay will study the participation process of a Spoken Word Poetry Class in a middle school on Maui island in the state of Hawaii. The author of this essay engaged in an internship in the Maui Arts & Cultural Center which introduced Spoken Word Poetry classes into the schools on the island. By analyzing records of the class, we will find the poets direct the use of voice among students by becoming models for them. The voice in the Spoken Word Poetry Class has to be raised, have a specific address and thus be heard. We can see these aspects of voice refresh poems and give them corporeality; thus the poems read aloud communicate effectively the poets’ original viewpoints toward being-in-the-world to those who listens. Eventually we will notice that the aspects of the voice allow participants to verify their “in-between world” which is equal community held actively by their voice practice. The in-between world changes the meaning of a school community so that it is not perceived as a mass enforced by schools or colonized system but as an assembly on which they are able to act by and for themselves.

「キーワード」
Spoken Word Poetry、詩、声、あいだ、共有性